せてあげる！」
　どんな美酒にも勝る美少女の淫気を搾り出すべく、メガネ少女淫魔は、魔樹にさらなる陵辱行為を命じる。
　じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷっ、ずちゅるっ……。
　生々しい注挿音を立てて、ペニス状触手のストロークが始まった。
　並みのペニスよりもずっと太く、長く、たくましい淫魔の責め具が、媚毒によって感度を増した膣壁を掻き鳴らし、粘液に満たされた子宮を突き嬲る。
「んぁ！　あっあっアッあんッ！　ひぐぅ！　アッ、ヒッ、ひぎいぃぃ……ンッ！」
　ハードなひと突きごとにボテ腹を揺らして絶頂してしまいながら、逆さ磔にされた肢体をわななかせる天音。
　乳房に貼り付いた触手も、張りを増した爆乳を力強くこね回し、布地を突き上げた勃起乳首を扱き上げ、脇腹や脇の下にまで振動混じりのくすぐり責めを仕掛けて、女体の奥底から淫気を搾り出し、吸収してゆく。
「お尻と膀胱も吸って上げなさい。滋養がたっぷり詰まっているわよ」
「いやぁぁ！　らっ、らめぇぇぇ〜ッ!!」
　淫魔少女に促された魔樹の触手に尿口と肛門を貫かれた天音の悲鳴が、温室の空気を甘く震わせた。
　尿道内を逆行したストロー状の触手は、細やかな振動で膀胱を震わせ、狂おしい尿意を発生させながら、小刻みに尿水を吸引する。
　慎ましやかにすぼまった肛門をこじ開けて挿入された触手は、無数のイボを蠢かせて腸壁を責め嬲りながら、媚毒粘液をたっぷりと注ぎ込み、浣腸責めを仕掛けて、恥辱の果てに耐えきれずひり出された物をズルズルと下品な音を立てて吸い込んでゆく。
　逆さ磔状態での陵辱は、数時間にわたって続いた。
「そろそろ、クリフォトの樹も満足したようね……まだ生きてるなんて、さすがだわ」
　徹底的に絶頂を極めさせられ、精も根も尽き果てた様子の天音を見ながら、メガネ少女はつぶやく。
　天音のコスチュームは、股間だけでなく、胸の部分も溶かされて、たわわな乳房がこぼれ出てしまっていた。
　弱々しく喘ぐ少女の碧眼は、ピントを失って虚ろに見開かれている。
「何百回絶頂したのかしらね？　場所を変えて、もっともっと搾り取ってあげるわ」
　巨樹淫魔に磔にされたままの天音が連行されたのは、植物園に付随した浄水場のような地下施設だった。
　薄暗い地下室に鎮座していたのは、とてつもなく巨大なウツボカズラのような淫魔植物であった。
「この中で、人外の快感に悶え狂わせながら、淫気の最後の一滴まで吸い取って上げる。……放り込みなさい！」
　グッタリと弛緩した天音の身体を吊り上げた魔樹は、ポッカリと開いたウツボカズラ淫魔の中に、無造作に放り込んだ。
「ぐ……ぅぅぅ……あ……あぁぁ……」
　ジュルッ……ズチュルルルッ……。
　弱々しく喘ぐ退魔少女の身体に、大小様々な形状をした触手が群がってくる。
「んぅぅ……んぐむぅぅぅンッ！」
　疲れ切った身体を起こして逃げようとした天音の口に、極太の触手がねじ込まれて声を封じた。
「んふ……んん……んふ……くふぅぅ……ンッ……」
　触手の表面に密生した柔突起が蠢いて、舌と口腔粘膜を愛撫すると、わずかに理性の光が戻りかけていた天音の目が虚ろに見開かれてしまう。
　両手両脚も抵抗虚しく絡め取られ、開脚された秘部にも、特大サイズの触手が迫る。
　大量に注ぎ込まれた粘液をドプドプと溢れさせる膣口をしばらくの間掻き回していた極太触手は、薄紅色の粘膜を強引に押し開きながら挿入を開始し

んな淫魔少女の声が届く。
（ほん……ばん……ですって……？）
今でさえ悶絶して気が狂いそうだというのにこの上何をしようというのか。その答えはすぐにわかった。
スーツの内外にいるスライムが陰唇の膨らみに絡みつき、くぱぁっと大きく開いてきたのだ。
「うぅ……っ!?」
スーツごしにラグビーボール型の秘部がすっかり透けて見えた。尿道の小さな穴はもちろん、男を受け入れるための器官もくっきりと透けている。
（犯され……る……！）
そう悟った瞬間、スライムがスーツの内と外から一斉に膣孔の中に流れ込み始めた。
ずちゅっっっ、ぐぢゅうううっっ！
「ひあ……！　あーーーーっっっ、あ、あーーーーーーっっっっ!!!」
淫魔水は志鶴の膣道を大きく押し広げるかのようにして侵攻してくる。襞の一枚一枚に絡みつき、くちゅくちゅと舐めしゃぶりながら奥へ、奥へと進み込んだ。
「あづううううっっっっっっ!!　あぁぁっ、熱いいいいいい！　おあぁっっ、おおおおおおっっっ！」
スライムの中に混ざっているのであろう媚薬成分が肉襞から直接吸収され、膣の中が燃えるように熱く、そしてむずがゆくてたまらない。
スライムは巧妙に処女膜の隙間をくぐり抜け、処女のまま武装風紀委員長の子宮口まで到達した。
「はぁぁぁぁぁぁ……！　おぉぉぉ……ぉぅんんっっ……おぉ……」
今まで感じた事の無い異物感に戸惑いながらも、彼女が感じているのは間違いなく快感であった。
（お……おなか……いっぱぃぃぃっ……）
志鶴の網膜の裏で何度も何度も極彩色の稲妻がスパークし、下腹部が煮えたぎるような熱さにつつまれる。
肉の快感が志鶴になじみ始めたのを見計らったかのように、スライムは膣の襞一枚一枚に吸い付き、そしてつまみ上げるようにして舐めしゃぶる。ぷるぷる震える数える事も出来ぬほどの襞全てから快楽電流が産まれだし、子宮から一直線に志鶴の脳に直撃する。
「んおおおおおおっっっっっ!!」
淫魔水に戒められた体がつっぱらかり、ブーツのつま先が水の中をかく。
「先輩、恥ずかしいところ、みんなに見て貰お？」
絡みつく数十の視線を意識させられる。見られている、見られてしまう。はしたないところを、気持ちよくなってしまうところを。
「――！　だめ、だめぇぇ、みな、みないでくださいま……し……みな――!?」
とどめとばかりに全ての肉襞に密着したスライムが高速振動を始めた。
ヴヴヴヴ……ン！
虫の羽音のような音が一瞬聞こえたかと思うと、肉壁全体が強烈な振動に襲われた。
「ひ――きひゃあああああぁあああああああっっっっっっ!!!」
恐ろしいほど甘美な痺れが腰の中で産まれた。快感の大波小波が腰の中でただひたすら暴れ回り、下半身が蕩けてしまいそうだ。
腰骨に快感波動が伝わると、体中の骨という骨に伝播していく。足のつま先から手の指先、悦感の塊となった乳房、そして快感の鍋でどろどろに煮込まれてしまったかのような脳。気持ちよくない場所などどこにも無かった。
「いぎぃいいいいいいいっっっっっ!!　ら、らめぇぇぇ、はぎいいいいいっっっっっ！　き、きもひいいっっっ！　よひゅぎてわらくひダメに……はぁぉおおおおおおおおっっ!!!」
絶頂に次ぐ絶頂が志鶴の理性を突き崩す。股間からは止めどなく真っ白な本気汁がたれ流され、時には潮までがぶしゃぶしゃとしぶいていた。その全てが淫魔少女のスライムの糧となる。

「ひぐぅぅぅうううっっ!?」
乳房の先にバチぃっと強烈なまでの痺れが走った。何事かとのぞき込むと、両乳房が引っ張られ、コリコリにしこりたった乳首と乳首が擦りあわされているではないか。
にゅちゅっ、ごりゅっとぱんぱんに膨らんだ乳輪ごとパンチングボールのように弾きあわされると、胸が爆ぜてしまいそうなほどに気持ちが良い。
「そ、それ、だ、だぁぁぁぁ、だ、だめぇぇぇっっっ！」
思わず目を見開いて、天を仰いでしまう。股間からはびゅるりびゅるりと濃い愛液が弾かれるたびにこぼれ落ちた。
もはや指にも力が入らずだらりとしてしまう。
「先生ももう限界みたいですね。いいですよ、私ももうきついですから一緒にイキましょう」
そういうと美濃部は激しく祥子の乳肉穴を突き上げた。
ずっちゅぐっちゅぎゅっちゅぎゅぶっっ!!!
「あはぁぁぁあぉぉぉぉぅっっっ、あ、く、はあああああああ!!!!」
巨根の熱にさらに摩擦熱が加えられ、全身が燃えるように熱くなる。
「だめ……だぁ……おっぱい溶ける……溶けてしまう……！」
「先生、イキますよ、イキますよ、あ、あっっ……くううううううううっっっっっっ！」
一瞬触手巨根が膨らんだような気がした。そして次の瞬間。
どびゅっっっっっっ!!! びゅるるるるるるるぅぅぅっっっ、どくどくどくっっっっ!!!
「あぶっっっっっ!! ぷわぁっっっ、あ、あづいっ、熱ぅぅぅぅぅ！」
触手がはき出した白い精液は肉棒の熱に負けぬほどの高温だった。まさにマグマと呼ぶにふさわしい。それがべったりと涙と涎で汚れた祥子の美貌にぶちまけられた。顔が焼けてしまいそうなほどに熱く、そして男臭い。しかしそれらが条約査察官の理性を根こそぎ奪い去った。
「あ……ぉ……あっ……！」
顔にびちゃびちゃっと熱湯がかかるたびに美濃部を乗せたままの腰が軽く浮き上がり、股間をけいれんさせてスーツごしに愛液を放ってしまう。
理知的な印象を受ける眼鏡にもたっぷりこびりついており、目の前が白く濁っている。
そして、熱が冷めてくると同時に彼女の理性もゆっくりと元に戻っていった。
（く、私としたことが……！）
「うふふふっっ……私のあつあつのおちんちんどうでしたか？ とっても美味しかったでしょう」
美濃部は勝ち誇ったような笑みを浮かべて祥子の腹から立ち上がった。その途中にもいまだ硬度を失っていないフタナリペニスの先端からびゅっ、びゅるっと白濁液がはき出され、乳悦に蕩けた条約査察官の美貌に精液パックをしていく。
「ん、くっ……！ お嬢ちゃん、センズリは気持ちよかったかしら？ あんまりやり過ぎるとお猿さんになるから気をつけなさいね」
白く粘ついた液をまとわせながら、祥子は挑発的に言い返した。
（今は、とりあえず時間を稼がない事にはどうにも何ないものね……）
少なくとも淫魔術について自分より相当格上の相手である。その上武装風紀委員長の神崎志鶴、退魔師の北霧天音両名の淫気を取り込んでいるのだから、さしもの祥子といえどもいまは打つ手が無い。
（あの娘達が早めに手を打ってくれれば良いんだけど、な）
せいぜい相手を挑発して責めを長引かせる事ぐらいが関の山。それも一歩間違えば自分自身が堕とされかねない危険な賭けだ。
このあたりの心理戦にかけては歴戦の条約査察官である祥子に分があったようで、美濃部はまんまと挑発に乗ってきた。
「やっぱりこのぐらいじゃ祥子先生はめげませんよね。でも安心してください。今私の淫魔法で先生のメスをちゃんと暴いてあげますから」
やや笑顔を引きつらせながら美濃部は手をブンッと振った。すると、その